

国立国語研究所学術情報リポジトリ

徳之島金見方言のイントネーションと名前呼びかけ 時に生じる長母音について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立国語研究所 公開日: 2025-01-24 キーワード (Ja): 琉球語, 金見方言, イントネーション, 長母音 キーワード (En): Ryukyuan, Kanami dialect, intonation, long vowels 作成者: 小川, 晋史, 金, アリン メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/0002000452

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License.



徳之島金見方言のイントネーションと 名前呼びかけ時に生じる長母音について

小川晋史^a 金 アリン^b

^a 熊本県立大学／国立国語研究所 共同研究員

^b 九州大学大学院 専門研究員

要旨

本稿は徳之島の北端に位置する集落のことばである金見（かなみ）方言について、まずは、金見方言の文末イントネーションが意味の対立を作り出すことがないことを報告する。これは、断定と疑問のイントネーション調査、および、複数のシチュエーションを設定しての呼びかけイントネーション調査の結果による。一方で、文中イントネーションについては、統語構造やフォーカスが反映されるなど、対立が認められるようである。そして、この方言においては人に名前で呼びかける場合に、語（名前）の基底には存在しない音声的な伸び（長母音）が生じる場合があり、長母音が生じる位置については語を単独で言い切る場合のピッチパターンから予測可能であることを示す*。

キーワード：琉球語、金見方言、イントネーション、長母音

1. 金見方言のアクセント

金見方言は鹿児島県徳之島の北端に位置する（図1参照）金見集落で話されていることばである。現在の話者人口は50名に満たない（金2022）と考えられ、多くの琉球諸方言と同様に消滅の危機が迫っている方言の1つである。イントネーションを論じるためにアクセント体系が明らかにされている必要があるが、金見方言のアクセント体系については、以下の表1で示すような体系であるということが金（2022: 51–54）で報告されている。モーラカウントで昇り核（上野1992）を持つ三型（X型、Y型、Z型）の体系であり、X型は高起式で無核（“0”）、Y型は低起式で語の後ろから1番目のモーラに昇り核を持ち（“-1”）、Z型は低起式で語の後ろから数えて2番目のモーラに昇り核を持つ（“-2”）とされている。また、基底にはない母音の伸び（長母音）が表層にしばしば表れることも報告されている。

* 本稿は国立国語研究所の共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」（プロジェクトリーダー：窪薙晴夫）の研究成果であり、同プロジェクト研究発表会（2019年5月11日、於：国立国語研究所）で口頭発表した内容を基にしている。「実証的な理論・対照言語学の推進」（プロジェクトリーダー：浅原正幸）のサブプロジェクト「日本・琉球諸方言におけるイントネーションの多様性解明のための実証的研究」（同：五十嵐陽介）、および「消滅危機言語の保存研究」（同：山田真寛）の研究成果でもある。また、筆頭著者に対するJSPS科研費（JP18K00580）および第二著者に対するJSPS科研費（JP21K00482）による成果の一部である。本稿における誤謬は全て著者の責に帰するものである。



図1 金見集落の位置

表1 金（2022）による金見方言の三型アクセント（表層形）

	基底1モーラ語	基底2モーラ語	基底3モーラ語
X型：高起式“0”	?ju (魚)	mui (丘)	haNmē (ご飯)
Y型：低起式“-1”	[dēʌ; (竹)]	u[gi (サトウキビ)]	kuju[mi (暦)]
Z型：低起式“-2”		[naʌ; \bi (鍋)]	ka[raʌdz̩i (髪)]

[: 昇り核、基本的にはこの記号のところでピッチが上昇する。
 / : 何らかの要因で昇り核の位置と異なる位置でピッチ上昇が観察される場合のピッチ上昇。
 \ : ピッチ下降。
 ; : アクセント情報に関係して表層に生じたと考えられる長母音の後半部。
 N : 撥音]

2. 金見方言のイントネーション調査と分析

金見方言のイントネーション調査にご協力いただいた話者は調査時点で70代の男性1名である。本稿で示すデータは全てこの話者のものであり、調査は2019年の3月に実施した。

2.1 文末のイントネーション

結論を先に述べると、金見方言の文末イントネーションは下降調（あるいは非上昇調）のみが観察され、文末イントネーションによる意味の区別はない。モーダルな意味を表す際にも特に有標なイントネーションは観察されず“一型イントネーション”とでも呼べそうな体系である。文末位置で意味の違いを作り出す場合は終助詞（あるいは接語）に依っているようである。

2.1.1 疑問と断定のイントネーション

以下では yes/no 疑問文 ((1)), wh 疑問文 ((2)), 断定文 ((3)) の順で調査した例文を示す。 (1a–c) は図 2 から図 4, (2a–c) は図 5 から図 7, (3a–c) は図 8 から図 10 で、それぞれの例文の音声波形とスペクトログラムについて Praat (Boersma and Weenink 2022) で描画した図を示す。例文の仮名表記については小川 (2015) に準拠している。また、例文および仮名表記についての注釈を※で示す。本稿の後半で五十嵐 (2023) の類型化にこの方言を当てはめる際にも重要な言語事実として、金見方言では文末に疑問を表す形式（終助詞）がない疑問文は非文となる¹ということをあらかじめ断つておく。

(1) yes/no 疑問文の例

(※名詞述語で終助詞「- セ」、形容詞述語と動詞述語で終助詞「- ミイ°」必須。「ミイ°」は /mii/)

- a. アリヤ オーサセ? (あれはアオサか?)
- b. マール ハントゥスームイ°? (毬を落とすか?)
- c. カンコクヤ ヒギュロハミイ°? (韓国は寒いか?)

(2) wh 疑問文の例

(※終助詞「- ガ」必須。)

- a. デインガ ナーバガ? (どれがキノコか?)
- b. アーカヤ イチー キーガ? (姉はいつ来るか?)
- c. ダーガ ‘ミイ°一チャハンガ? (どこが危ないか?) (※ ‘ミイ°」は /?mii/)

(3) 断定文の例

(※コピュラは「- ャ」だが、名詞述語で必須ではない。)

- a. アリヤ オーサド。(あれはアオサだ。) (※ 「- ド」はモダリティマーカー)
- b. アチャー キューイ。(明日来る。)
- c. アラ, ‘クワーハイ。(いや、狭い。) (※ ‘クワ」は /?kwa/)

¹ 琉球語諸方言には yes/no 疑問文において形態的疑問標識が必須であるものが多い (五十嵐 2023) と指摘されている。金見方言の場合は wh 疑問文でも形態的疑問標識が必須。

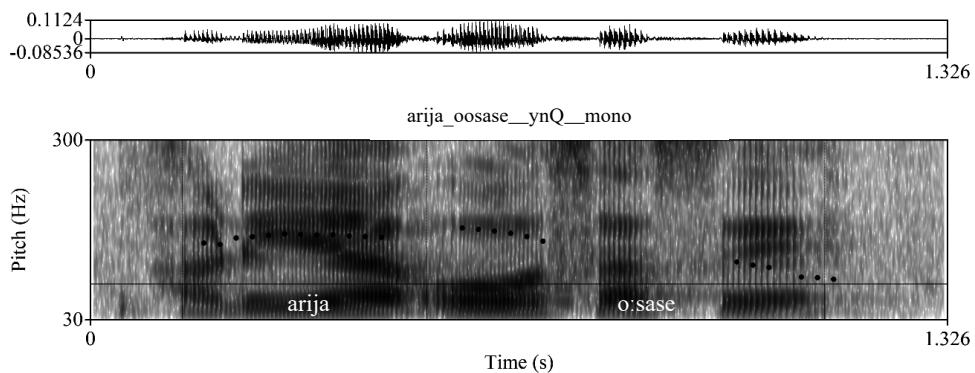


図 2 yes/no 疑問文「あればアオサか？」

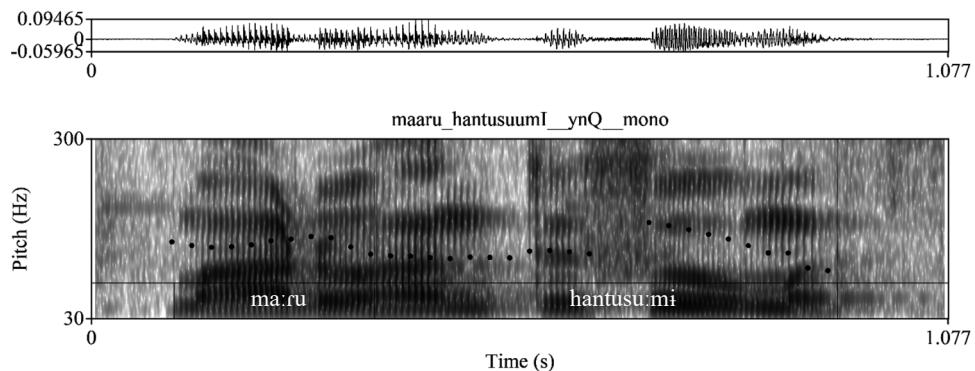


図 3 yes/no 疑問文「毬を落とすか？」

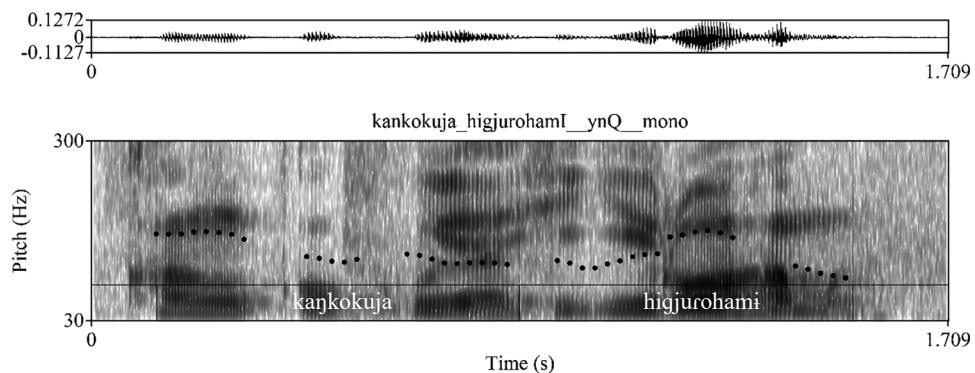


図 4 yes/no 疑問文「韓国は寒いか？」

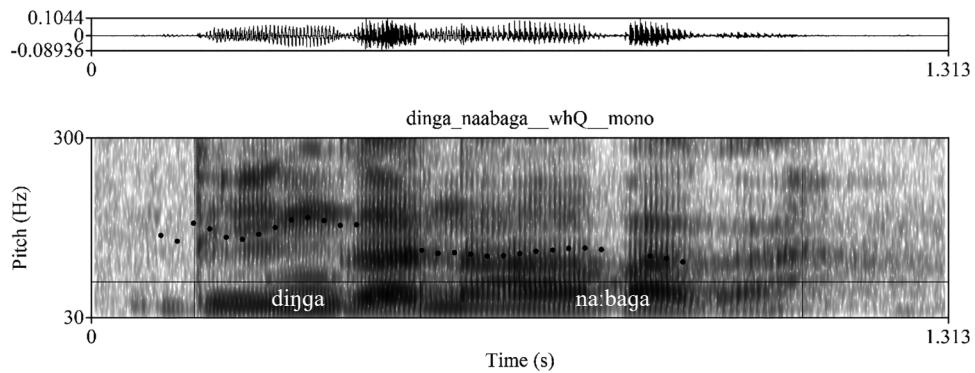


図 5 wh 疑問文「どれがキノコか？」

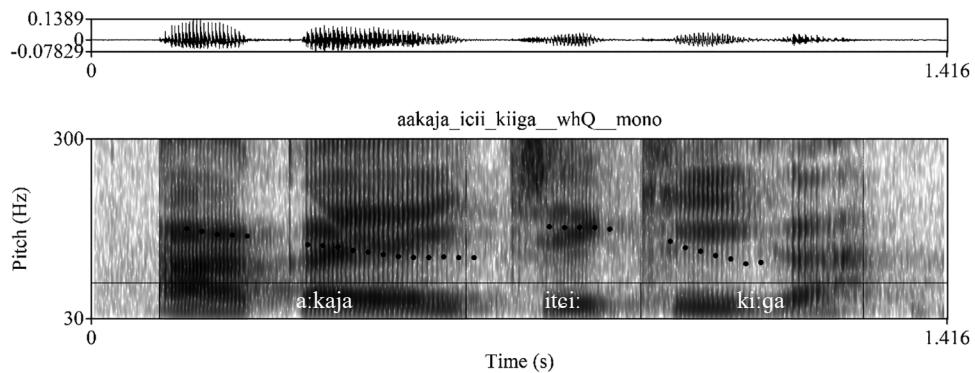


図 6 wh 疑問文「姉はいつ来るか？」

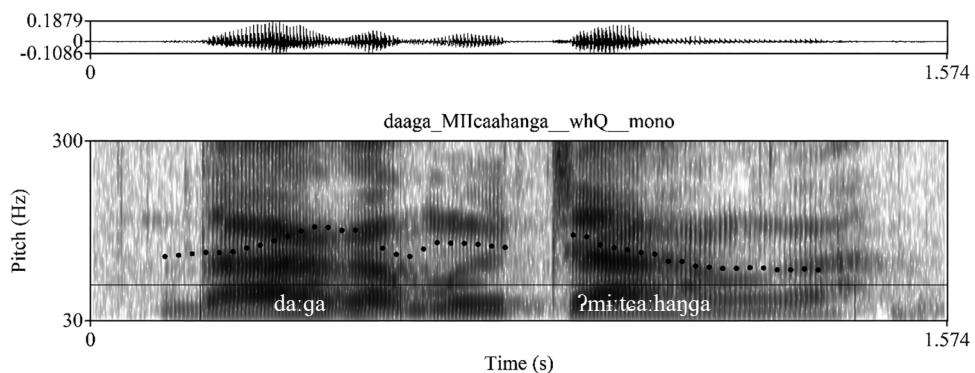


図 7 wh 疑問文「どこが危ないか？」

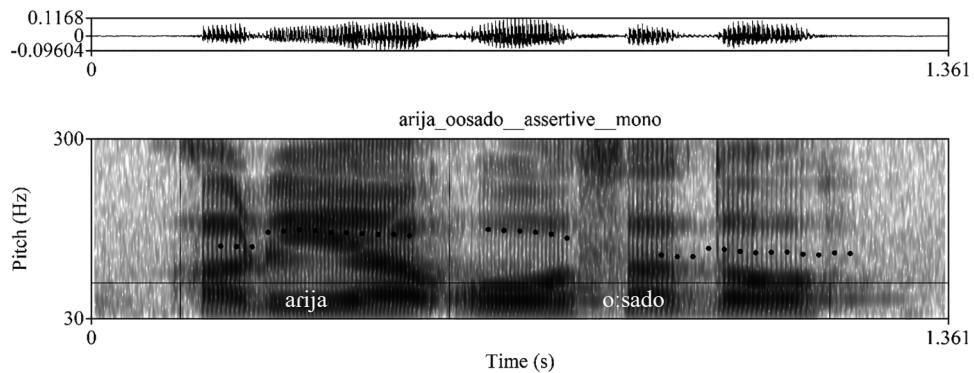


図 8 断定文「あれはアオサだ。」

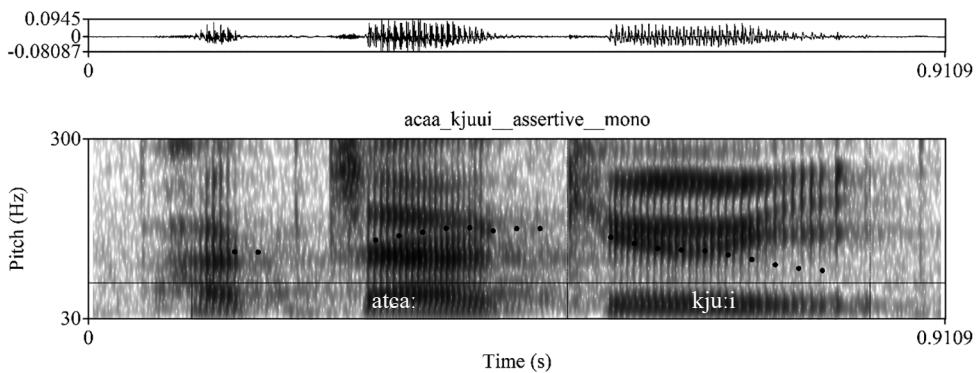


図 9 断定文「明日来る。」

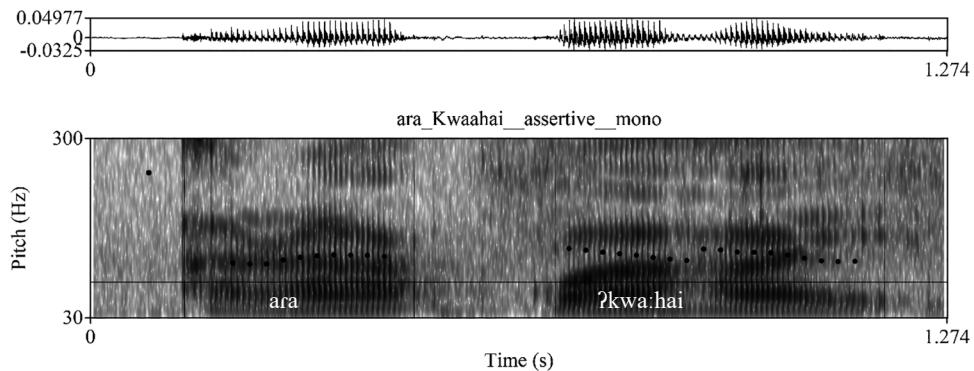


図 10 断定文「いや、狭い。」

いずれの文においても下降調イントネーションしか見受けられない。断定と疑問でイントネーションが異なるということもない。五十嵐（2021）にまとめられている内容から判断するに、金見方言がyes/no疑問文におけるイントネーションとして上昇調を許さないというのは、世界の諸言語の中でも類型論的に珍しい特徴だと言える。そして、五十嵐（2023）による4種類のパラメータ((4))を用いたyes/no疑問文の類型化の枠組みと分類（表2）に当てはめると、金見方言は伊良部方言や小野津方言と同じ類型（Type 1）ということになる。

(4) 五十嵐（2023: 38）によるyes/no疑問文（YNQ）イントネーション類型化のためのパラメータ

- a. [± DQ]: 形態的疑問標識を欠く YNQ が可能か否か
- b. [± RiseDQ]: 形態的疑問標識を欠く YNQ に上昇句末音調が現れるか否か
- c. [± RiseMQ]: 形態的疑問標識²を伴う YNQ で上昇句末音調は可能か否か
- d. [± ChoiceMQ]: 形態的疑問標識を伴う YNQ で句末音調に選択肢があるか否か

表2 五十嵐（2023: 40）による諸方言の分類

	Type 1 伊良部	Type 1 小野津	Type 2 上嘉鉄	Type 3 池間	Type 3 首里	Type 4 国頭	Type 4 伊平屋	Type 5 鹿児島	Type 6 東京
[± DQ]	-	-	-	-	-	+	+	+	+
[± RiseDQ]						+	+	-	+
[± RiseMQ]	-	-	+	+	+	-	-	+	+
[± ChoiceMQ]	-	-	-	+	+	-	-	+	+

このように、形態的な疑問標識が必須であり、かつ上昇調が現れないという類型論的に珍しい体系が琉球語においては地理的に連続していない複数地点（北から、小野津方言は喜界島、金見方言は徳之島、伊良部方言は伊良部島）で確認されているということは特筆すべきことである。

2.1.2 呼びかけイントネーション

9つのシチュエーションにおける呼びかけイントネーションについては本稿末の付録を参照して頂きたい。調査にあたっては、日本言語学会ワークショップ「日本語の呼びかけイントネーション」（窪薙2018、平田2018、溝口2018）の内容を参考にした。溝口（2018）で設定されている9つのシチュエーション（注意を引く、責める、存在確認、葬式、遠くにいる、目の前にいる、久しぶりに会った、心配している、お願いをする）に準じた場面の画像を話者に示し、その場面をイメージして名前を呼んでもらうという調査を行った。3つのアクセント型の語それぞれについて9つのシチュエーションでの呼びかけイントネーションを示している。全体としてはシチュ

² この(4c)について、原著では「形態論的疑問標識」となっているが、著者に確認した上（五十嵐陽介、私信）で(4)の他3つと名称をそろえた「形態的疑問標識」として引用した。

エーションによってイントネーション³に特別な違いは見受けられない。調査中の話者の反応を見ても、特別に区別しているような様子は確認できなかった。声色や声の大きさはいろいろだが、イントネーションの違いは無いと見なしていいと考えている。

2.2 文中のイントネーション

次に、文中のイントネーションを調査するために、Kubozono (1988), 郡 (2006), 五十嵐 (2010), Igarashi (2014), などを参考にして、右枝分かれ構造が埋め込まれた統語境界において、基本周波数 (F0) の立ち上げが起こるかどうかの調査を実施した。左枝分かれ構造と比較して示す。図については (5a) が図 11, (5b) が図 12 に対応している。また、例文には簡易的なグロスをつけており、NOM は nominative の略号である。

(5) 例文のペア 1 (真奈美)

- a. 左枝分かれ 「真奈美の父親（を）ちょっと待った。」
マナミ = ヌ アージャ ナイグワ マッチ
真奈美 = の 父親 ちょっと 待った
- b. 右枝分かれ 「真奈美が父親（を）ちょっと待った。」
マナミ = ガ アージャ ナイグワ マッチ
真奈美 =NOM 父親 ちょっと 待った

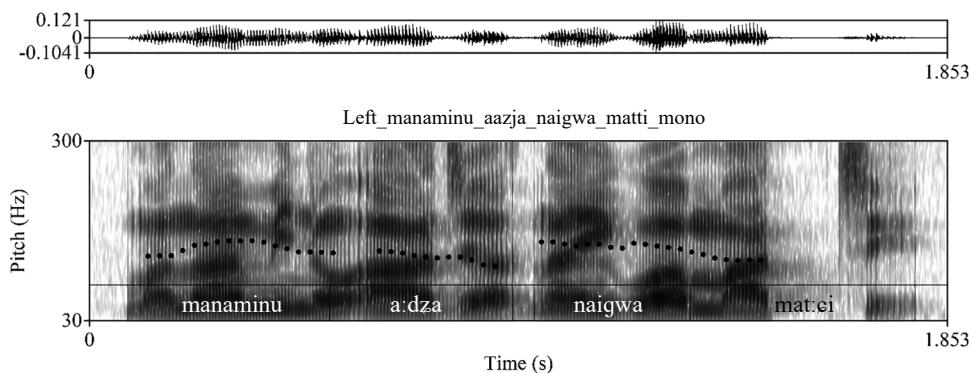


図 11 左枝分かれ「真奈美の父親（を）ちょっと待った。」(=5a)

³ ここでは特にピッチ変化の違いを意味している。本稿では母音の伸長をイントネーションに含めていない。

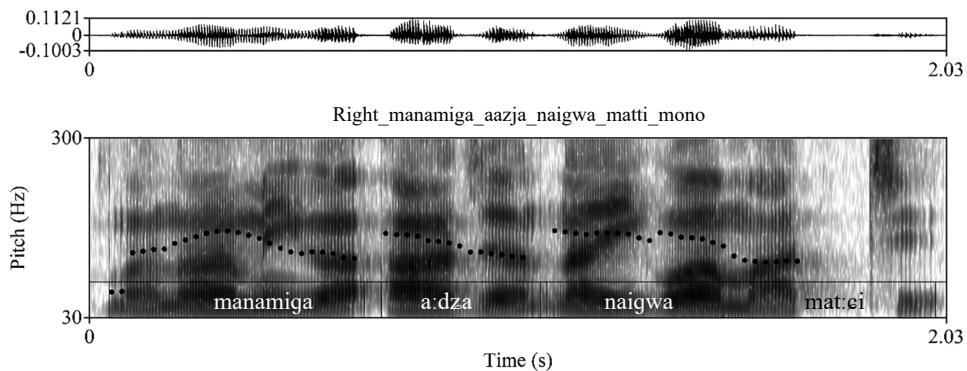


図 12 右枝分かれ「真奈美が父親（を）ちょっと待った。」(=5b)

この(5)(および図11, 12)に挙げた2つの例文を比較すると、「父親」(アージャ)のところで左枝分かれ構造と右枝分かれ構造で違いが出ていていることがわかる。(5a)では「父親」(アージャ)で立ち上げが起きないが、(5b)では立ち上げが起きている。すなわち、右枝分かれ構造の統語境界において立ち上げが起きている。また、「ちょっと」(ナイグワ)のところでは(5)のいずれの例文においても基本周波数が高くなっているが、今回使った例文にはフォーカスが置かれる位置をコントロール(固定)して枝分かれ構造の分析を容易にする意図があり、その意図した位置で基本周波数が高くなっているため、これはフォーカスによるものであると考えている。

加えて次の(6)は、音素の並びとアクセントも全く同じになる文のペアである。図については(6a)が図13、(6b)が図14にそれぞれ対応しており、方言の助詞“ヌ”が連体修飾(「～の」)の解釈をされる場合と主格(「～が」)の解釈をされる場合とで文中イントネーションが異なることがわかる。(5)と同様に(6)でも右枝分かれ構造の場合は、(6b)において「卵(を)」(クーガ)のところで立ち上げが起きている。(6)のいずれの「全部」(ムール)でも基本周波数が高くなっているのは(5)でもあったフォーカスによるものと考えられる。

(6) 例文のペア2(ハブ)

- a. 左枝分かれ「ハブの卵(を)全部食べた。」
マジュン＝ヌ クーガ ムール カーデイ
ハブ＝の 卵 全部 食べた
- b. 右枝分かれ「ハブが卵(を)全部食べた。」
マジュンヌ クーガ ムール カーデイ
ハブ=NOM 卵 全部 食べた

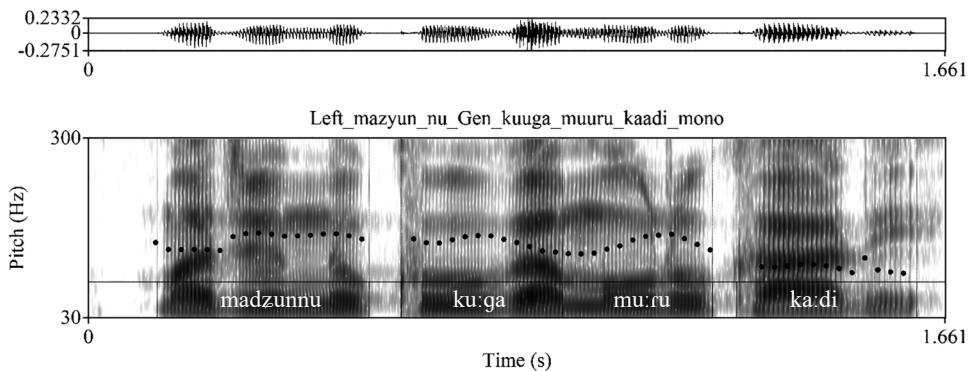


図 13 左枝分かれ「ハブの卵（を）全部食べた。」(=6a)

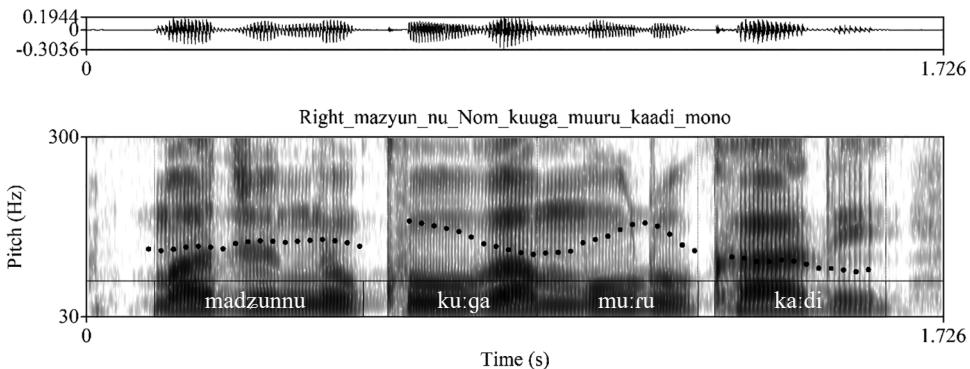


図 14 右枝分かれ「ハブが卵（を）全部食べた。」(=6b)

以上、(5) と (6) のいずれにおいても右枝分かれの文では、2 番目の文節のところで立ち上げが起こっている。また、フォーカスがかかりやすい副詞のところで基本周波数が高くなることもわかる。つまり、この方言においては統語構造（およびフォーカス）が文中のイントネーションに反映されると言える。

2.3 名前で呼びかける際に生じる長母音

2.1.2 節の呼びかけイントネーションの調査の結果（付録 1～3）に観察されるように、この方言では名前を呼ぶ際に、基底にはない長母音が（義務的ではないが）生じる場合があるため、それについても最後に触れておきたい。調査してみると、例えば以下のようない例が得られる。(7) の矢印の右側がそれぞれの名前で呼びかけた際に生じやすいパターンである。とくに長母音（引き音）の位置に注目して頂きたい。

- (7) a. 真紀子 (まきこ) → まーきこ, まきこー
 b. 小川 (おがわ) → おがーわ
 c. 崎田 (さきた) → さきたー

上の例のように、一見するとこれらの長母音はどこで生じるかが予測できないが、アクセントとイントネーションの双方を考慮したうえでピッチ変化を検討すると、規則性が見出される。(8) はそれぞれの名前を単独で発話（言い切り）した場合に表れるピッチパターン（矢印の左側）と呼びかけた場合に表れるピッチパターン（矢印の右側）を模式的に示したものであるが、およそピッチ下降の位置と相関して長母音が生じているのがわかる。後で示す(9)ではピッチ上昇と相関して長母音が生じるので、ピッチの上昇・下降というよりは、ピッチの頂点がくる音節（の主音）を長くすると言えるようである。ただし、9つのシチュエーションのなかで遠くに呼びかける場合についてのみ(8b)の場合であっても(8)に示した基本的なパターンに加えて、(8a)の「まきこー」や(8c)の「さきたー」のように、語末に長母音が生じる発話（eg. 「おがーわー」、「おがわー」）が観察された。

- (8) a. まきこ まきこ → まーきこ まきこー (アクセントは“0”型)
 b. おがわ おがわ → おがーわ おがわー (アクセントは“-2”型)
 c. さきた さきた → さきたー さきたー (アクセントは“-1”型)

要するに、出現自体は非義務的であるものの、長母音が現れるとすれば、①アクセントに起因するピッチの頂点が来る音節、②語末音節、のいずれかあるいは双方という規則性がある。

以下の(9)のようにもともと重音節（あるいは特殊モーラ）を含む語の場合は(8)のような例に比べると表層で母音伸長が生じる頻度は下がるが、絶対に生じないわけでもなく、母音伸長が生じる場合の位置については、(8)と同じくピッチの頂点がくる音節（の主音）が長くなるという一般化で良さそうである。

- (9) a. ゆうま → ゆーーま
 b. しんじ → しーんじ
 (※二重母音後半および促音に頂点がくる“-2”型の名前は採れていない。)

アクセント的には伝統的方言にないようなピッチパターンを示すものについても、呼びかける場合に生じる長母音の位置とピッチパターンについては例外になってない例も示しておく。

- (10) アクセントが伝統的方言の例外だが名前呼びかけは例外になっていない例
アルペルト → アルペールト

以上のように、音節構造および特殊モーラの種類をいろいろと変えて、1～6モーラまで全部で100種ほどの名前を調査したが、以下の一般化で説明が可能である。

(11) 名前呼びかけ時に長母音が生じる際は ...

- 名前だけを単独で言い切る場合のアクセントに起因するピッチの頂点が来る音節、あるいは語末音節、あるいはその双方を長くする
- 当該音節がそもそも重音節の場合は長母音は生じにくい
- 遠くに呼びかける場合は、長母音は語末音節（あるいは語末音節とピッチの頂点が来る音節の双方）に生じやすい

この一般化（規則）の例外と言えるのは、例えば (8c) で「さーきた」や「さーきたー」のように、語末音節以外でアクセントによるピッチの頂点が来ない音節に長母音が現れる場合 (i.e. 「さー」) だが、そのような例は調査した中には見られなかった。最後に、参考までに比較的長め（基底で 4 モーラ以上）の語の例も示して本節を終える。

(12)	a. <u>おおやま</u>	→ <u>おおやま</u> → (大山, アクセントは “0”型)
	b. <u>むさしまる</u>	→ <u>むさしま</u> <u>る</u> → (武藏丸, アクセントは “-2”型)
	c. <u>こうもと</u>	→ <u>こうも</u> <u>と</u> → (幸元, アクセントは “-1”型)

3.まとめ

本稿では徳之島の金見方言のイントネーションについて報告した。文末ではイントネーションによる意味の対立がなく、文中では統語構造やフォーカスによってイントネーションが異なることを示した。金見方言は五十嵐（2023）による yes/no 疑問文の類型化によれば珍しいと言える類型に分類される。また、名前呼びかけ時に生じる長母音については、語（名前）を単独で言い切った場合のピッチパターンから長母音の生じる位置が予測できることを論じた。琉球語の方言イントネーション研究はまだまだ積み上げが少ない分野であって、諸方言の研究成果の蓄積によってより精密な類型化が可能になると期待されるところである。

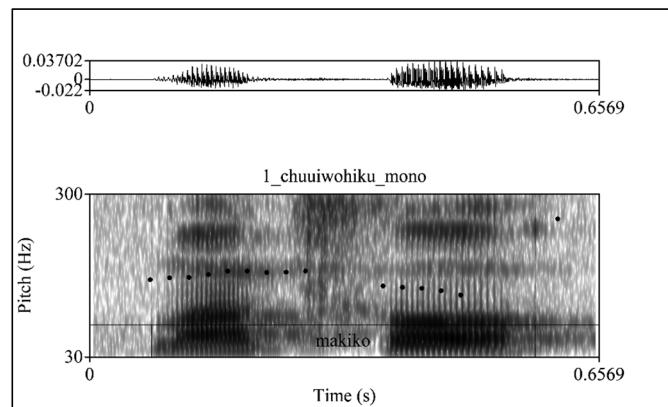
参照文献

- Boersma, Paul and David Weenink (2022) Praat: Doing phonetics by computer [Computer program]. Version 6.2.18. retrieved 8 August 2022 from <http://www.praat.org/>
- 平田秀 (2018) 「小林方言の呼びかけイントネーション」『日本言語学会 第 157 回大会予稿集』438–441.
- 五十嵐陽介 (2010) 「統語論における枝分かれ構造は韻律にどのように反映されるのか?—近畿方言と東京方言の場合—」『第 24 回日本音声学会全国大会予稿集』185–190.
- Igarashi, Yosuke (2014) Typology of intonational phrasing in Japanese dialects. In: Sun-Ah Jun (ed.) *Prosodic typology II*, 464–492. New York: Oxford University Press.
- 五十嵐陽介 (2021) 「日本語諸方言のイントネーションと言語類型論」窪薙晴夫・野田尚史・プラシャント・パルデシ・松本曜 (編)『日本語研究と言語理論から見た言語類型論』22–48. 東京：開拓社.
- 五十嵐陽介 (2023) 「南琉球宮古語池間方言の疑問文イントネーション」『日琉諸語の記述・保存研究』1: 24–42. 東京：国立国語研究所.
- 金娥璘 (2022) 『徳之島諸方言の名詞アクセントの記述的研究』博士学位論文, 九州大学.
- 郡史郎 (2006) 「韻律的特徴の地域差」広瀬啓吉 (編著)『韻律と音声言語情報処理—アクセント・イントネーション・リズムの科学』50–64. 東京：丸善.
- Kubozono, Haruo (1988) *The organization of Japanese prosody*. Ph.D. dissertation, Edinburgh University.

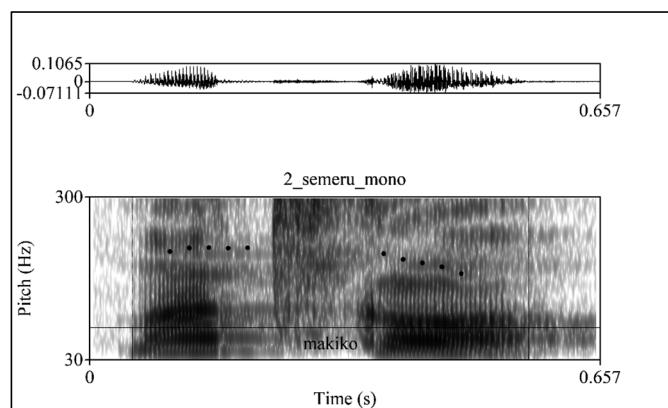
- 窟蘭晴夫 (2018) 「鹿児島方言と甑島方言のイントネーション」『日本言語学会 第157回大会予稿集』432–437.
- 溝口愛 (2018) 「東京方言の呼びかけイントネーション」『日本言語学会 第157回大会予稿集』426–431.
- 小川晋史 (2015) 『琉球のことばの書き方—琉球諸語統一的表記法』東京：くろしお出版.
- 上野善道 (1992) 「昇り核について」『音声学会会報』199: 1–13.

付録 1：「まきこ」（アクセントは X 型 “0”）の 9 つの場面でのイントネーション

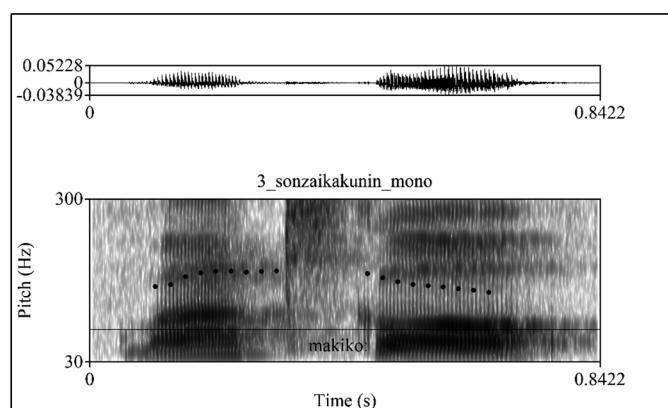
①注意を引く



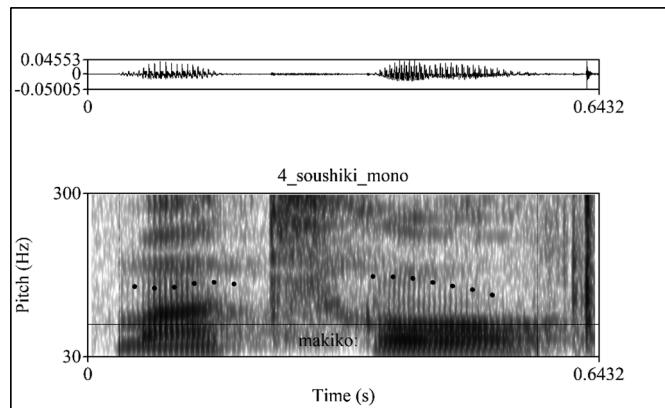
②責める



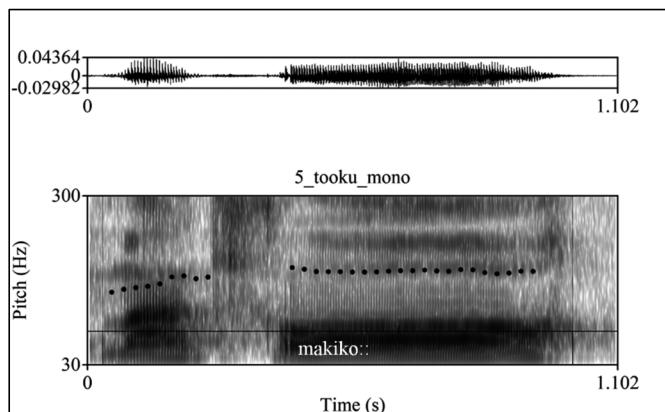
③存在確認



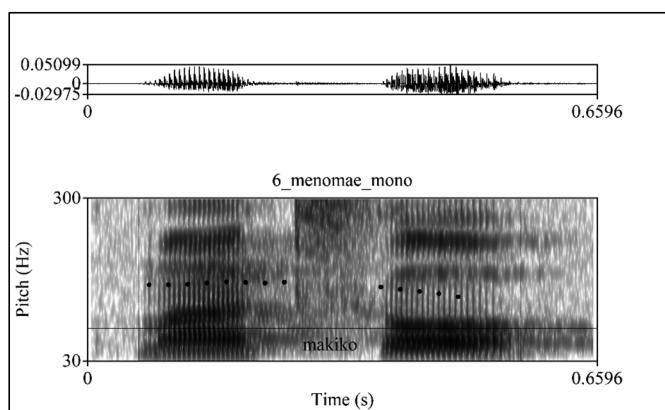
④葬式



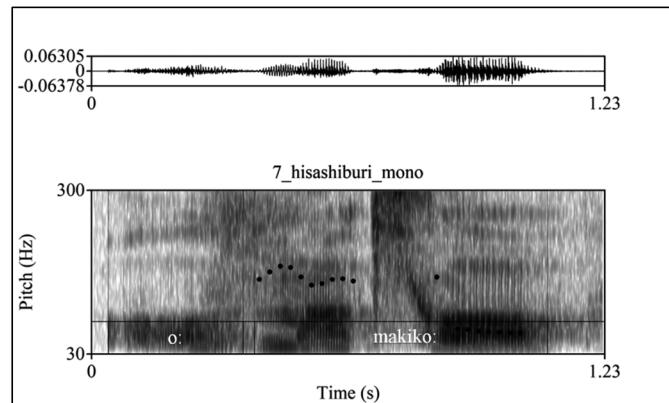
⑤遠くにいる



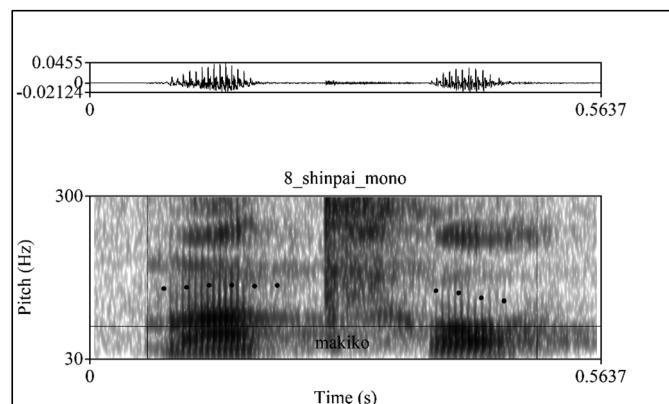
⑥目の前にいる



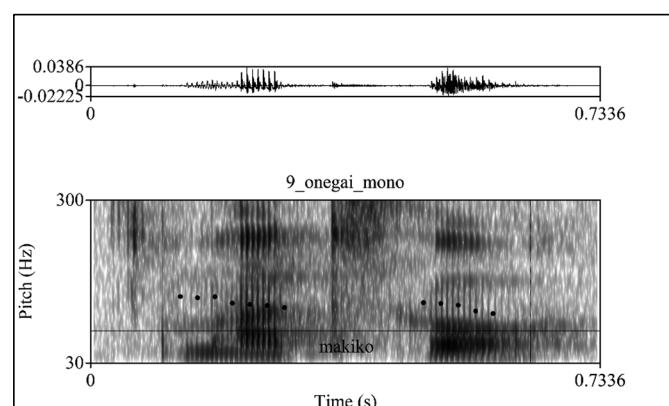
⑦久しぶりに会った (※オ一[o:]は間投詞)



⑧心配している

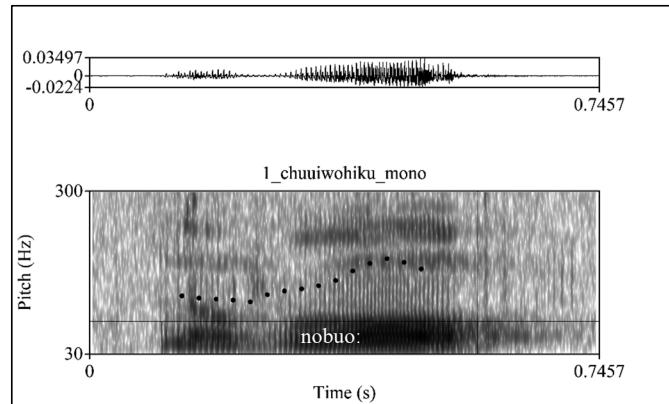


⑨お願いをする

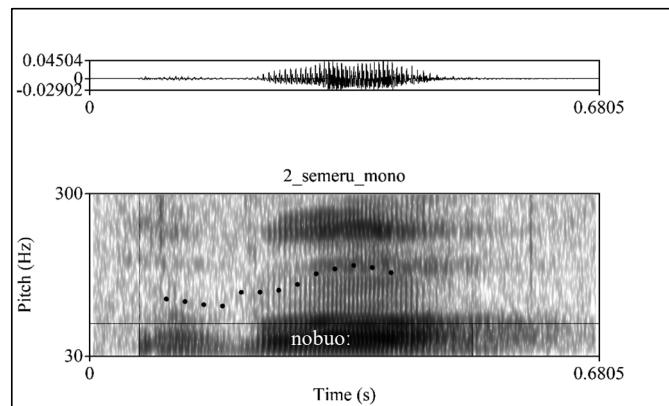


付録 2：「のぶお」（アクセントは Y 型 “-1”）の 9 つの場面でのイントネーション

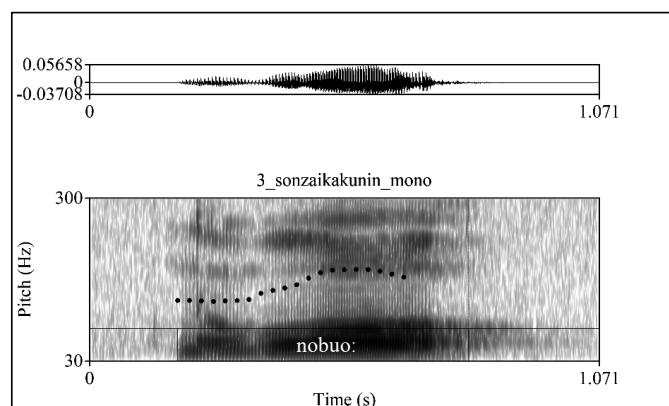
①注意を引く



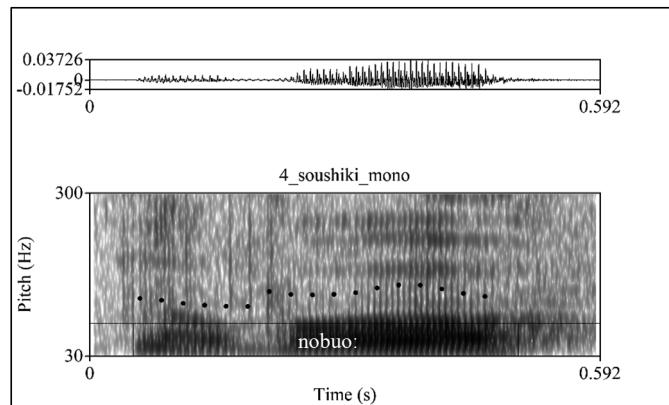
②責める



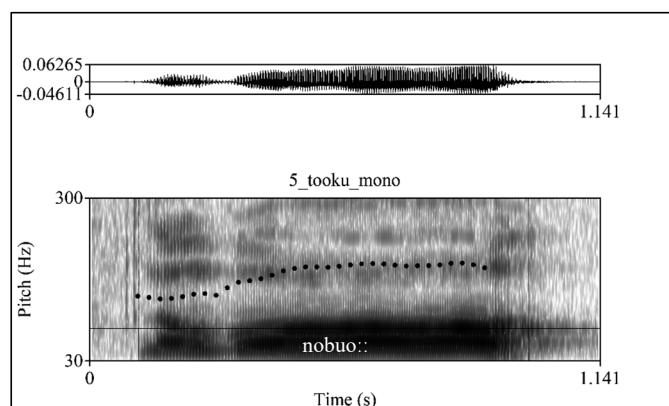
③存在確認



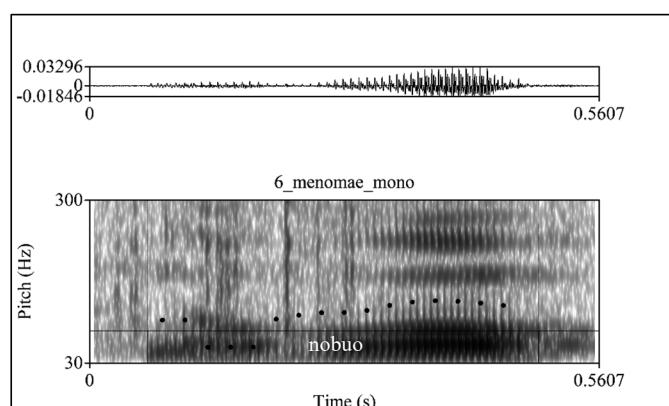
④葬式



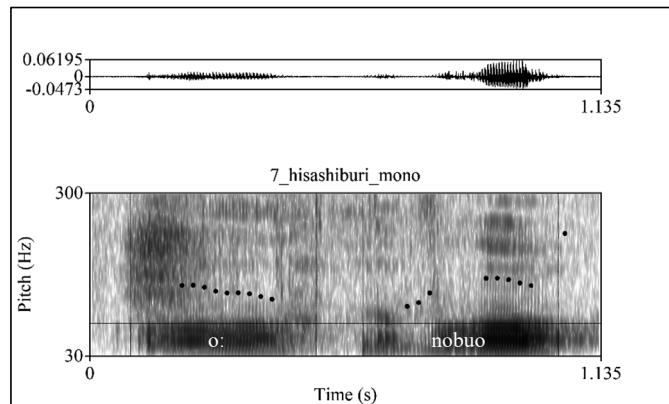
⑤遠くにいる



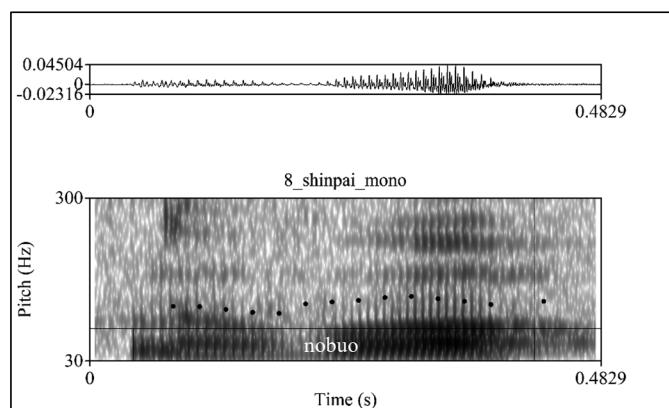
⑥目の前にいる



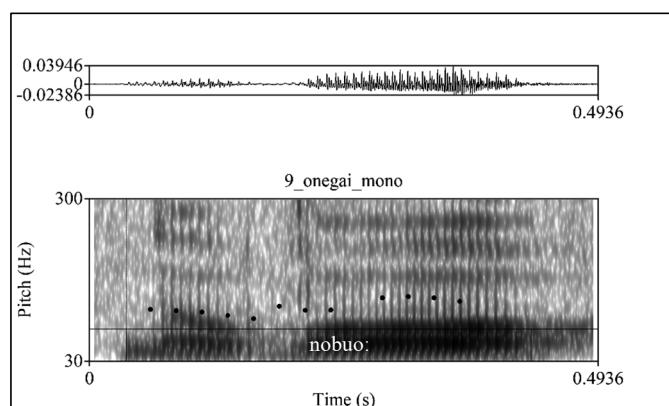
⑦久しぶりに会った (※オ一[o:]は間投詞)



⑧心配している

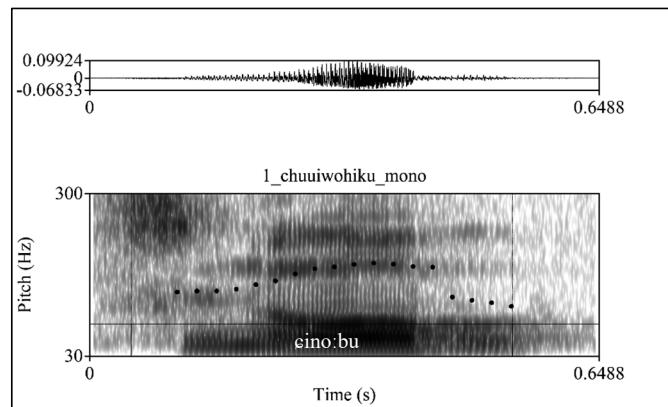


⑨お願いをする

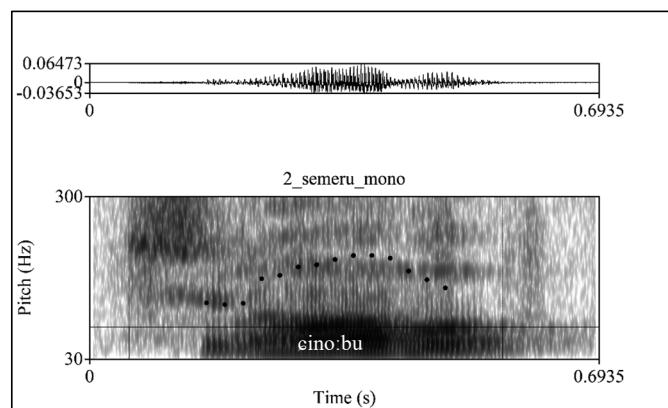


付録 3：「しのぶ」（アクセントは Z 型 “-2”）の 9 つの場面でのイントネーション

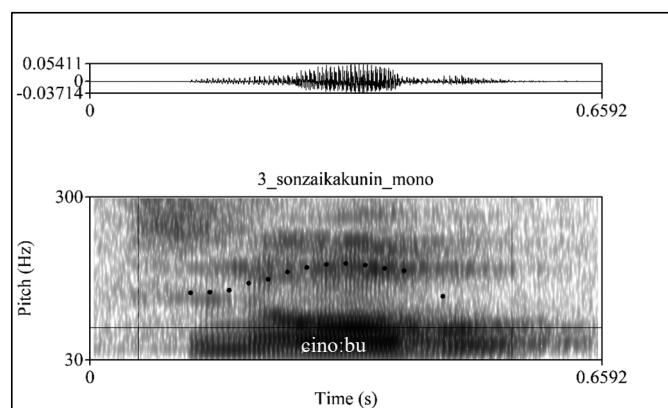
①注意を引く



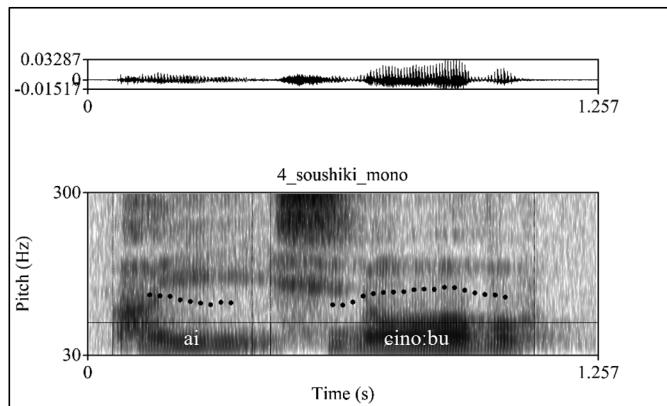
②責める



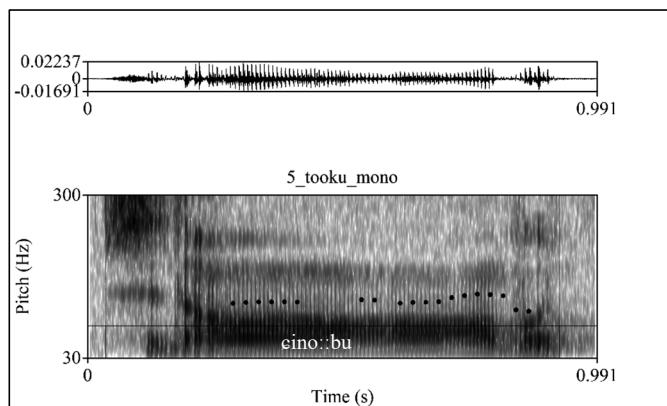
③存在確認



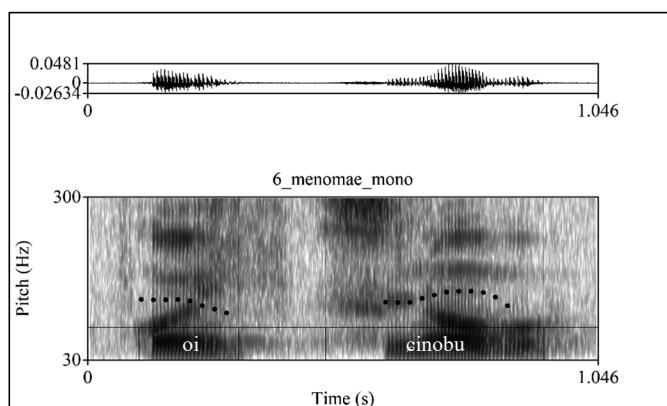
④葬式 (※アイ[ai]は間投詞)



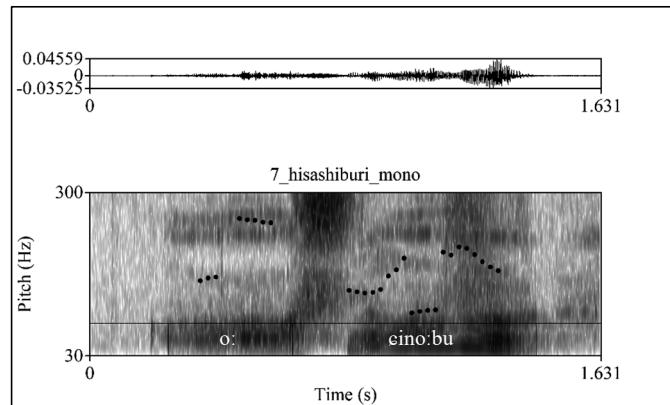
⑤遠くにいる



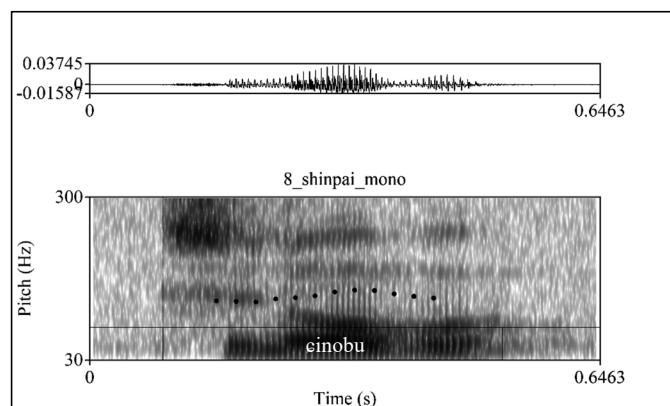
⑥目の前にいる (※オイ[oi]は間投詞)



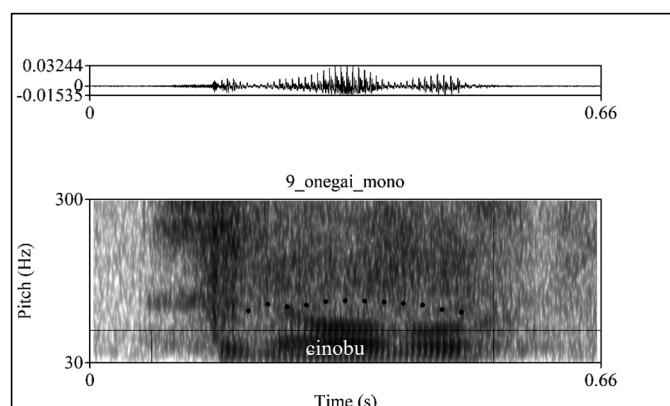
⑦久しぶりに会った (※オ一[o:]は間投詞)



⑧心配している



⑨お願いをする



Kanami Ryukyuan Intonation and Long Vowels When Calling Someone by Name

OGAWA Shinji^a KIM Alin^b

^aPrefectural University of Kumamoto / Project Collaborator, NINJAL

^bSpecialized Researcher, Kyushu University

Abstract

This paper reports that the intonation at the end of a sentence in the Kanami dialect, the language spoken in the hamlet of the same name located along the northern tip of Tokunoshima Island, does not create opposition in meaning. This conclusion is based on the results of research on affirmative and interrogatory intonation and research on intonation in multiple situations when making an appeal. However, mid-sentence intonation creates opposition in syntactic structure and focus, among other aspects. In addition, this research shows that when calling someone by name in this dialect, long vowels that do not exist in the underlying representation (name) may occur in some instances, and that the position where phonetic lengthening occurs may be predicted based on the pitch pattern when a word is said independently.

Keywords: Ryukyuan, Kanami dialect, intonation, long vowels